

9 大坂冬・夏の陣でも戦功、七万二千石・古河城主

永井直勝 (1563～1625／大浜)



1 松平信康（徳川家康の長男）の目にとまった美少年

下総国（現千葉県北部及び茨城県の一部）古河七万二千石の城主となった、右近大夫永井直勝は、三河一向一揆動乱の永禄6年（1563）大浜の宝珠寺で生まれた。大浜羽城を守る父長田重元の二男直勝は、幼名を伝八郎と言った。

天正4年（1576）の夏頃から三河・遠州地方に風流踊りをするのが流行した。あるとき、大浜から岡崎にかけて踊り歩いた群れの中に美しい少年がいた。岡崎城にいた舞踊を好む松平信康（家康の長男）の目にとまり、やがてこの美少年は近侍（近習・小姓）として召し出された。この美少年こそ、13歳の直勝であった。直勝は、踊りや太鼓を打つことも抜群で、読書・手習い・武芸まで歳に似合わない程器用であった。

2 困難を極めた家康の帰国（伊賀越え）を助けた直勝

3年後、信康の自刃という不運な事件（信長の命により、家康から自殺を命じられた）の後、直勝は大浜に蟄居した。武士として出発した志は、思いもよらない事件のためにくじかれてしまった。ところがその翌天正8年（1580）、直勝は家康に召し出され浜松で仕えることになった。そして30貫の地をもらい、長田改め大江氏となり、家号を永井というようになった。

その後、家康に従って京都・堺へ同行したが、天正10年（1582）6月の本能寺の変によって伊賀越えをし、伊勢の白子から船で大浜へ着いた。このとき直勝の案内で、羽城の重元の屋敷に寄って無事岡崎城に帰ったと言われている。

3 長久手の戦いで功績、三千石の知行

天正12年（1584）、21歳の若武者直勝は、長久手の戦い（家康が織田信雄と一緒に豊臣秀吉と争った）に出陣、49歳の敵将池田恒興（勝入）と戦いになった。馬の上から槍で突いたところ、恒興も槍で応戦し、直勝は指を落とされた。しかし直勝は、ひるまず攻め立て引き倒し、馬上から飛び降りて恒興の首をとった。その功績により家康より三河の中で千石の知行を与えられ、恒興愛用の「篠の雪」という刀をもらった。翌天正13年（1585）、直勝は更に二千石を加増され、合わせて三千石の知行を持つようになった。そして東端（現安城市東端町）に住んだ。

4 小田原の戦いで五千石に加増、朝鮮征伐で右近大夫に任命される

天正18年（1590）4月、秀吉軍20万余は北条氏の本拠小田原城を包囲した。北条氏は3ヶ月に及ぶ籠城戦を続けた。7月5日には当主北条氏直が投降し、ここに北条早雲以来5代の戦国大名北条氏は滅亡した。49歳の家康は、この小田原討伐の論功行賞で秀吉から北条氏旧領の関東8カ国を与えられた。直勝も家康の家臣として参戦し、その戦功により家康から旧地をあらためて、相模国田倉、上総国市原、武射三郡のうちにおいて五千石をもらい、江戸に移った。

文禄元年（1592）、秀吉の朝鮮征伐の命により、家康とともに名護屋（東松浦半島突端）へ出陣。秀吉に褒められ豊氏姓を受け、従五位に叙せられ右近大夫となった。

5 大坂冬・夏の陣でも戦功

慶長 5 年（1600）9 月の関ヶ原の戦い（59 歳の家康率いる東軍と、41 歳の石田三成を中心とする西軍が美濃北部の関ヶ原で激しい戦闘をした）に直勝も出陣し、東軍の完勝により、直勝は近江野洲など二千石を加増され七千石の身分になった。

その翌年には、与力、同心を預けられ三河国碧海郡の地に四千五百石の加増となった。42 歳で書院番頭に出世した。慶長 12 年（1607）7 月には、直勝は家康について駿府城に入った。しかし慶長 17 年（1612）、30 年来連れ添った妻が亡くなった。直勝 49 歳のときであった。

慶長 19 年（1614）11 月の大坂冬の陣（73 歳の家康軍が豊臣方のいる大阪城攻撃に出陣する）、翌慶長 20 年の大坂夏の陣（徳川方が大坂城を総攻撃。豊臣秀頼とその母淀君が自害し、豊臣氏が滅亡した）には、直勝は軍奉行として、長男尚政とともに参加した。直勝は常に家康の側近にいて主の命を守り、戦いを有利に導く上で相当な働きをした。その戦功により上野國小幡に一万石を加増された。嫡男尚政も四千石を加増され、都合五千石になった。

6 七万二千石の古河城主に

元和 2 年（1616）4 月 17 日、大御所家康は 74 歳で没した。駿府にいた直勝は、江戸に上って二代将軍秀忠に仕えた。その翌年、常陸国笠間の城主となり、三万二千石の大名となった。その 10 月、妻の死の 5 年後、菩提を弔うため盛岸院の堂宇を建立した。

元和 5 年（1619）、土浦に二万石を拝領し、秀忠のお供をして京都に上った。その 2 年後には、日光東照宮奥院宝塔の造営奉行となり、立派な社殿を完成させた。その功により二万石を加増され、翌年下総国古河（現 茨城県古河市）で七万二千石の城主となった。

直勝はその 3 年後、寛永 2 年（1625）12 月 29 日、江戸で 62 歳の波乱と栄光の生涯を閉じた。長男尚政は、古河に永井寺（えいせいじ）を創建、父直勝を葬った。直勝の遺した教訓歌には「気をしずめ、いふべきことをひかえつつ、人のこころを破るべからず」「人のため、よかれと思ふ心こそ、わが身のためとなるはほどなし」がある。

7 由利姫と永井荷風など著名な子孫たち

由利姫は寺津大河内家から東端城主直勝に嫁ぎ、長男正直をもうけた。不義の疑いで離縁、根崎（現 安城市根崎町）で自殺したが、祠には陣屋の松がある。

文豪で文化勲章を受章した永井荷風は、この正直の直系である。その他能楽師の野村万作、小説家の高見順とその娘でタレント恭子がいる。

なお、小説家の三島由紀夫は古河城を継いだ直勝の長男尚政の末裔である。

8 直勝の叔父に永田徳本

外用消炎鎮痛剤で知られる会社名でお馴染みのトクホンこと「永田徳本」は、直勝の叔父であり、二代将軍秀忠の重病を治したと言われる。また、徳本は全国を行脚し、貴賤を問わず治療に当たり、医聖と呼ばれた。118 歳で下諏訪の地で亡くなったと言われ、宝珠寺には記念碑と徳本稲荷がある。

◆もっと知りたいなら

- ・『永井直勝』(昭 39 鈴木成元)
- ・『永井直勝』(平 16 季刊誌『みどり』
石川繁治)